第 17 回日本在宅医学会もりおか大会　**一般・指定演題**

（実践報告）抄録用紙

演題名 （全角 80 字以内）	住み慣れた在宅で過ごすために ～膵がん・胆道がん教室参加者の事例より～
演者名	１）古本直子、奥元直美、白嵜純子、小田真基子 ２）藤本佳史 ３）木村泰博
所属	１）厚生連広島訪問看護ステーション ２）JA 広島総合病院 ３）ピー・エイチ・イー　きむら内科小児科

目的

平成 25 年 2 月より、併設の地域がん診療連携拠点病院で「膵がん・胆道がん教室」を開始した。その目的は、患者・家族に病気について知識を深め、安心して療養生活が送れるようにすることである。また、終末期の療養場所の決定を行ってもらうことでもある。そのプログラムの中に、地域連携についての枠があり、地域の在宅医から「在宅療養について」の説明がある。その時教室に同席し、訪問看護の説明も行っている。膵がん・胆道がん教室参加者の概況、その中の在宅看取りを行った事例について報告する。

実践内容

「膵がん・胆道がん教室」を開始し、1 年が経過した。全 27 回、参加患者数は 65 名、家族 80 名であった。うち、死亡者数は 25 名で、そのうちの 4 名に訪問看護を行なった。その中で在宅看取りを行った 2 事例について報告する。

実践効果

膵がん・胆道がん教室に参加し「在宅でも過ごせることが分かった」「たくさんのスタッフが関わってくれていることが分かった」「教室に参加して、在宅で過ごそうと決めた」などの声があった。2 事例からは、「在宅で看取れてよかった」「情報が役に立った」の評価ももらった。また、地域がん診療連携拠点病院と在宅療養支援診療所との連携もできた。

考察

教室での学びで、療養場所を在宅にするという自己決定ができたこと。在宅でも過ごせるという安心感・自信にも繋がったと考える。

課題として、「通院できるのに、なぜ主治医を変わらなければいけないのか」「まだ治療しているのに最期を考える状況ではない」など患者側の意識が問題もあり、関わるスタッフは難しさを感じている。